

詩カテゴリーの機能と位置

浜田秀 (天理大学文学部)

Shu.Hamada@ma4.seikyuu.ne.jp

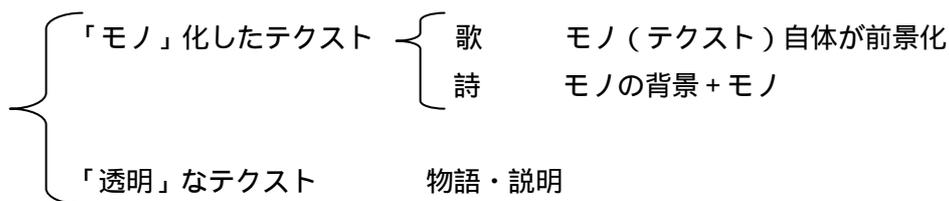
詩の本質は何か、という問題は、単純には片づかない。しかし、我々は、取りあえず、(日本語の)「詩」という用語を滞りなく使用している。ここには、何らかの直感的理解が成立していると考えられる。

この直感的理解を「カテゴリー認知」の問題として考えよう。従来、「詩」の中核にあると考えられてきたメタファー・リズム・感情といった要素は、カテゴリー認知の観点から考えると、例外が多すぎて、有効なものとは言い難い。「詩」カテゴリーの本質は、他の文体的カテゴリー(物語・歌・説明...)との比較の上で明らかにされねばならない。

詩のカテゴリー認知には、二つの側面が関わっていると考えられる。

形態的側面 : 余白
内容的側面 : 非・具体時性

余白は、詩において、聴覚的な無音のトーンを、共感的に構成する機能を担っている。テキストの存在自身が問題となる、という点では、「歌」と共通し、「物語」「説明」と対立する。ただし、「歌」はあくまで音の前景部が関与するのに対して、「詩」は背景部分が問題となっている。



具体時性とは、一回限りの完結した事態の持つ時間性であり、「物語」カテゴリーの中核部分として機能している。多くの「詩」は、この具体時性を回避したところに存在している。

形態・内容の両側面に共通するのは、「知覚的に際立たない」という性質である。詩は、際立たないことによって、受け手に、「集中」ないし「退屈」という作用をもたらす。